

教育実習生の職業的社会化に関するエスノグラフィー ー授業づくりに関する「パースペクティブ」の変容を中心にー

橋本啓紀（広島大学大学院）

1. 問題の設定

本報告の目的は、教育実習生が教育実習を経験する中で何を習得しているのかを、エスノグラフィーの方法を用いて彼らの視点から明らかにすることにある。

教職への職業的社会化に関する先行研究において、教師役割の受容や教師役割遂行の際に必要な技能などの「役割・手段的側面」を問題とするものは少ない。特に、教育実習についてはその影響の大きさが指摘されているが、そこでどのような技能や考え方が習得されているのかに関して、具体的な検討はほとんど加えられていない。

したがって、「教育実習生はどのような経験をし、どのような専門的知識・役割を身に付けているのか」という教育実習の過程の詳細については、検討の余地があると思われる。

以上をふまえて、教育実習の具体的な状況を把握する事例研究を目指してフィールド調査を行った。そこから、教育実習生を分析するための枠組みを検討した上で、彼らの視点から教育実習の過程を解明することを試みた。

2. 調査の対象と方法

1998年10月、1999年6月、2000年6月の3回、X大学附属Y中・高等学校（以下、附属Y校と略記）における「教育実習Ⅲ」を調査対象として、参与観察・インタビュー調査を実施した。「教育実習Ⅲ」の特徴と、実施した調査の概要は次の通りである。

「教育実習Ⅲ」は、ほぼすべての実習生が2週間の実習期間中、宿舎に入る宿泊実習であることが大きな特徴である。また、附属Y校では、X大学の教育学部の学生だけでなく、一般学部

の学生も受け入れている。実習生たちは、実習教科ごとに分けられた後、4,5人から10人弱の実習グループに分かれる。実習活動はすべてこのグループを基本単位として行われる。実習教科や実習グループの人数によって例外はあるが、実習生は2週間の間に3,4回の授業を行う。

参与観察の主たる対象は、地理歴史科（世界史）と公民科の実習グループであった。その実習生の合計は、3回の調査で合計34名（教育学部13名、その他の学部21名）である。観察については、実習生が行う授業はもちろん、朝のホームルームの観察実習、放課後の批評会、控え室や宿舎での行動等、常に対象の実習グループと活動を共にする中で、実習生と同じ立場から参与観察を行った。授業の観察には、担当する実習生が作成した指導案を手元において臨んだ。また、この参与観察と平行して、実習生へのインタビュー調査（本人の許可を得て録音）も実施し、主として観察された行動・発言の意図を尋ねた。ただし、指導する教員には調査上の制約からインタビューを実施できず、実習生への指導は批評会の観察から把握できたものの、その意図を確認することはできなかった。そのため、実習指導に関しては所与のものとして扱い、実習生がそれをどう解釈しているのかを記述するようにした。

3. 分析の枠組み

以上のような形で調査を進めていく中で、実習生が最も多くの時間を割いているのは、授業を立案するという教科指導に関する活動であるということがわかった。附属Y校の教育実習では、ホームルームに実習生が所属するといっ

ても、生徒と接することは朝のホームルームをのぞけば、ほとんどその機会がない。実習生たちは、授業観察や批評会以外の時間のほとんどを、控え室で指導案を立案・作成することに費やしていた。また、夜間、宿舎で過ごす時間の多くも指導案作成に割いており、夜遅くまでそれに取り組む姿が観察された。

したがって、ここではフィールドにおける観察・分析の焦点として、実習生が実習活動、特に授業を実際に立案し、行っていく中で形成している「パースペクティブ」(perspective)の特質に着目することにした。「パースペクティブ」とは、Becker ら(1961)によれば「共通の問題状況に直面した集団が、その問題をめぐって相互作用をなす中で創出していく行動と思考の様式」である。

実習生たちも、実際に授業を自ら立案して行わなければならないという「共通の問題状況」に直面し、それを乗り越えるために様々な「相互作用」を交わしていく。とすれば、この Becker らの枠組みをもとに、実習生の「集団パースペクティブ」(group perspectives)を明らかにすることで、彼らが実習の中で何を習得しているのを解明できると思われる。

そこで本調査の初期段階においては、フィールドノートをもとに、次の二点を観察・分析の枠組みとして設定した。第一に、実習生が考える課題意識の変化に注意を払いながら、教科指導に関して何を「共通の問題状況」として彼らが定義しているのかに着目した。第二に、実習における様々な相互作用の中で、教科指導に関してどのようなことが実習生に示唆されているのかに注意を払い、彼らがそれをどのように解釈していくのかに着目した。

4. 調査の結果：教育実習生と「教材研究」

実習生が当初に自覚していた教育実習における課題の内容は様々であった。しかし、多様な課題意識はあくまで実習生たちの想定にすぎない。それらは実習を行っていく中で、先に

記したように実習のほとんどの時間が指導案の立案・作成に割かれることから、授業づくりに関する活動に集約されていくようであった。

特に実習生へのインタビューや実習活動中における発言で繰り返し見出されるのが、「教材研究」という言葉であった。たとえば、「『教材研究』が不十分でした」や、「『教材研究』の時間がもっと欲しい」などがそれにあたる。批評会をはじめとする教育実習のフォーマルな活動だけでなく、実習生どうしの雑談の中でも、しばしばその言葉が用いられていた。ここで言う「教材研究」とは、授業のための指導案を作成する過程で行われる、該当する単元内容についての学習、資料・板書計画の作成、授業の展開の構想をはじめとする一連の学習活動のことを意味している。

このため、附属Y校の教育実習生が形成する「集団パースペクティブ」は、「教材研究」を「共通の問題状況」と見なすものではないだろうかという仮説的知見を導いた。

もちろん、「教材研究」の重要性は、実習生に対するオリエンテーションでも強調されている。しかし、具体的なレベルでそれにどう取り組めばよいかということは、ほとんど指導されない。したがって、実習生たちは、大学の講義や高校までの授業経験などをもとに、各々の行い方で「教材研究」に取り組み始めていた。

その「教材研究」の行い方が評価される場が、実際に授業を行った後の批評会である。そこでは、授業に対するコメントを通じて、様々な「教材研究」に対する考え方が示唆される。特に、指導する教員のコメントは、表現が抽象的なものであれ、実習生にとって大きな意味を持つようであった。

教育実習の過程は、このような中で指導する教員をはじめとする周囲の「教材研究」に関する考え方を集約して、当初に抱いていた授業づくりに関する「パースペクティブ」を変容させていく過程であると思われる。